

===== 目次 =====

- P1
今号の TOPICS
「新代表のメッセージ」
- P2
谷川企画専任幹事
- P3
4班 虫を見つめる日々
3班 家庭菜園奮戦記
- P4
2班 再び 山門水源の森
1班 並木
- P5
リレー随筆 「しづやしづ」
私の玉手箱《新企画》
- P6
俳句サロン
絵手紙コーナー
工作同好会
「5月活動から」

◇自然と文化だより

「KEEP SMILING !

東日本大震災の日から、3カ月が過ぎ去ろうとしています。被災者のみなさんは我慢強く、健気に、明日の復興を目指して頑張っておられます。

KEEP SMILING

私たちも見習って生きたいものです。

自然と文化だより9号から、新企画「私の玉手箱」を設けました。科員の方々の「玉手箱」をお互いに紹介し合って、励みにしていきましょう。」



今号の TOPICS

★来る者を拒まない「自然と文化科」を目指して★

代表 武井 貢

東日本大災害の発生から、早や、3ヶ月が過ぎました。犠牲になられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

さて、私は、4月の役員選出により、伝統ある「自然と文化科」の代表に選出され、科の運営をお任せいただいた責任の重大さを痛感しています。

自然と文化科は2004年4月に先輩たちが設立され「自然を理解し、人の活動を歴史的に捉え、人と自然との付き合い方を考える」と言う高邁な理念のもとに、「研鑽に励み、社会に役立つシニアであることを目指し、すべての活動が参加して楽しい活動であるよう、全員が常に心がけると共に積極的に運営に参画する」をモットーにして活動しています。ところが、「自然と文化科」は設立以来、今年で7年目ですが、その間の科員数は、15、29、48、62、69、84、85人と、毎年増えてきています。喜ばしいことですが、従来通りの活動をこれからも継続するには、限界に近い人数になっていると思われます。今後も、「自然観察、文化や史跡探訪、公開講演会、植生調査、社会貢献等」の活動方針を堅持するには、何らかの対策が必要です。

そこで、まず、科員増加に対する対応策が最優先課題であるとの思いから、平成21年7月から数名による「体制検討委員会」を設立し、議論を進めましたが、明確な結論を出せませんでした。引き続き平成22年8月に「体制検討委員会」を再発足させ、「来るものは拒まず、去るものは追わず、さらに良きもの来る」の精神で“定員制や在籍年数の制限は、現在の科員を追い出すことになるので導入はしない”という基本方針で、運営方法を検討してきました。その結果を＜現在の「自然と文化科」諸問題＞にまとめ 皆様に報告しました。今年度は報告した諸問題をさらに深く検討し、運営方法に工夫を凝らしながら試行し、更なる活性化を図るなど、新たな手立てを講じることで科の健全化を図り、科員が増加しても満足度の高い運営を構築していきたいと思います。

人生 80 年といわれる今、後半の人生を豊かで楽しく送るため、「集える居場所」、「誰かと何時でも話せる場所」、「心身ともに健康維持」のための自然と文化科を目指して、「参加して楽しく、心触れ合う活動であるように、常に心がけていきたい」と思います。

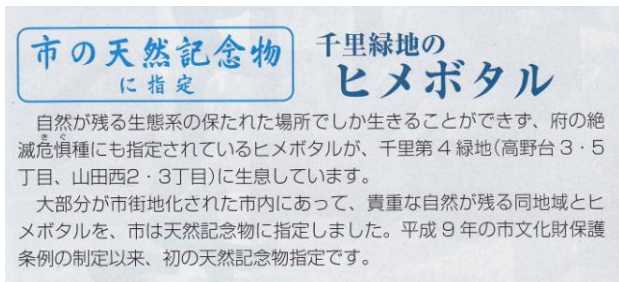
知恵を出し合い、創意工夫により今を乗り越え、科員が増えても、未来に希望の持てる科を創って行こうではありませんか。皆様のご理解、ご支援をお願いいたします。

天然記念物になった吹田のヒメボタル

企画専任幹事 谷川 稔

都市化が進む吹田市にヒメボタルがいます。吹田市は最近このヒメボタルを天然記念物に指定しました。このヒメボタルは、陸ボタルで川がなくても住める蛩で、湿った場所であれば生きていけます。1970 年の万博開催を期に千里丘陵は開発され田んぼや竹林は住宅地に変身しました。

万博開催前に建てられた住宅は建替えの時期です。今でも、阪急南千里駅周辺や毎日放送跡地は大型開発が進められ、小学校を増設しなければならなくなっています。万博開催より 40 年、一方では高齢化が進みながら開発がすすむアンバランスの状態にあります。



万博開催後 40 年以上たった私の住む山田地区にヒメボタルは生き残りました。関西電力の高压電線が開発を拒否しました。竹林と雑木林が北側斜面に生え、ため池が 3 箇所残り湿った環境を維持してきました。住民の朝晩集う散歩道です。多くの人が訪れています。

毎年、この時期になるとヒメボタルの観察会が行われます。風の無い晴れた日の午後 8 時以降に来ると蛩に会えます。

一端を紹介します。



ヒメボタルの看板

ヒメボタルの調査(蛩の出る日毎日)

ヒメボタルは、小さな巻貝オカチョウジガイを食べる。

5/8 子供たちが捕まえたのはトカゲ

生き物が住める環境が残り、万博との中継地の役割を果たしています。



竹林ボランティア募集の看板 竹林散策ケーブルテレビ取材 2008.7.31 イカル千里緑地 2009.3.11



この場所に蛩が多い(学校の裏) ため池(高町池)野鳥も多い

高町池のアオサギ 2010.5.8

虫を見つめる日々

4班 吉野 久司

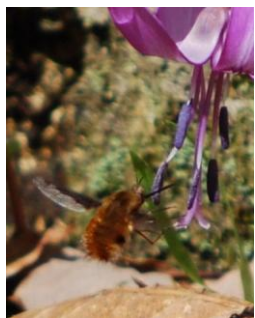
今年の春も地元の里山で、カタクリの花を訪れる虫たちを注意深く観察する日々だった。

山頂周辺は近畿では数少ないカタクリ自生地のため、シーズン中は入山者も多い。観察路整備や保護活動に誘われ入会し、もう5年になる。

カタクリはスプリングエフェラル(春の妖精)と呼ばれ、同時期に活動を始めるチョウ(あえて種名は伏す)、ハナバチ、ハナアブ等による虫媒花と一般的に考えられている。しかしここでは、カタクリの蜜標めがけ虫たちが飛びつく姿は稀にしか目にしないのだ。

人の気配を警戒して現れないとか、観察の時間帯が悪いなどの意見もでた。そこで保護区域内でシーズン通し、どの程度虫がいるのか調査しようと、植物より虫が好きな私にも声がかかった。

今年はカタクリ開花前より観察開始したが、期待したチョウも羽化個体数少なく、チョウ以外でカタクリとの接触を確認したのは、未同定のハナバチ(写真右)と、ツリアブぐらい。いずれも入山者のいない時間帯で、個体数の多いビロードツリアブの吸蜜は初めて目にした(写真左)。



他の周辺昆虫は、カタクリ受粉対象外?のコバチ、アリ類やニクバエ程度。例年多いマルハナバチ類も、シーズン中わずかで巣穴への出入りも2~3回。

観察路閉鎖後のGW終盤、咲き始めたウスギヨウラクに吸蜜するコマルハナバチがようやく確認出来た。

今シーズンもカタクリの開花数に比べ、直接の受粉対象昆虫は周辺含めても圧倒的に少なかった。

ここ3年の観察では、昆虫だけの媒介でこの里山のカタクリが増殖しているとは判断できない。今後は自家受粉や栄養繁殖も継続調査の課題だ。

やっぱり来年もカタクリの前に立ち、じっと虫たちを見続けていることだろう。

家庭菜園奮戦記

3班 益田 尚徳

「淀川自然クラブ」の「花と野菜グループ」に入って1年、昨年の春にスタートした。場所は枚方市出屋敷、地元農家の方が約400坪の土地を提供され、牧野さんを通して「淀川自然グループ」の「子供グループ」用と「花と野菜グループ」に活用、其々野菜を植えています。 昨年はジャガイモの植え付けで始まり、サツマイモ、大根、そして玉ねぎを植え付けた。

週1回の活動日と、世話のかからない作りやすいものを選んだつもりが、どっこい世話のかかることおびたしいものがあり、ジャガイモは芽かきに始まり草抜きそして土寄せ、サツマイモも暑いさなかの草抜き、つるがえし、大根も間引きに始まり土寄せ、草抜きと世話が掛かります。又、形や色が変わったトマト、巨大な葉のズッキーニ、植えつけの間隔が狭いと指導を受け、何度も植えなおし、お陰で立派なものをたくさんゲット、丹波の黒豆としていただいた苗はつるが出てきて胡瓜と判明、この胡瓜はたくさんとれ、いただいた方に感謝。

今はエンドウとソラマメが花をつけ、実をつけ、収穫している。地道な作業、土寄せと草取りのしんどいこと、「子供達には植えつけから収穫までの作業をさせてこそ、はじめて自然観察の勉強ができるのだ。観光農園ではないぞ。」ぶつぶつと言いながら、収穫を楽しみ、子供たちが喜ぶ様子を想像して作業をしている。

野菜作りの喜びは、経験しないとわかりません。種をまき、芽が出た時の嬉しさ、どんどん伸びた芽がやがて大きな葉や根や実になる、その過程は感動の連続です。そして、みずみずしい採れたての野菜が食べられ、もぎたてトマトをガブリとかじった時の口中に広がる酸味のきいた独特の甘さ、これは買ってきたものでは味わえない、大地と太陽の味だ。この1年、土井さんに教えていただき、グループの皆さんに教えられ無我夢中の1年、感謝多々です。



再び 山門水源の森

2班 木邨 圭子

山門水源の森へ初めて行ったのは夏真っ盛りの8月初旬、森はブナの南限とアカガシの北限という特殊な立地条件を持つという。夏の深い緑の森や湿原を歩いて、珍しいハッチョウトンボやかわいく咲いていたサギソウなどを見たのが新鮮な驚きだった。

3月末、サークルの人にさそわれて山門水源に行く気になったのは去年の印象が心に残っていたからだ。朝早く電車に乗り湖西線永原駅からタクシーに乗って到着。管理人の若者が「今年は雪がまだたくさん残っていますよ。」と声をかけてくれた。

入り口を少し歩いたところからもう雪道になっていた。しばらくして足が止まったのは雪の間に白い花が咲いていたからだ。「バイカオウレンという名前やよ。」と教えてもらった。そばに行き屈んでよく見ると小さくて梅の花にとてもよく似ていた。「今が一番盛りできれいなときやね。」初めて見るバイカオウレンの白い花。歩き進んで行くとあちらこちらに咲いていた。これから成長して大きくなろうとする芽吹きと枯れ葉が積もった雪道を進んで行った。

山々の木々は葉を落とし湿原の辺りは去年あれほど緑一面だったのに雪で覆われ、湿原の植物は立ち枯れたままだった。時々聞こえる鳥の鳴き声と風のそよぎの他は静寂の世界だった。夏の緑に覆われた世界と比べ何と表情の違うことか。山道を歩いて行くと道端に咲くシュンランの葉の間から小さな蕾が顔を出していた。ショウジョウバカマも所々でピンクの花を咲かせていた。木々を見ると茶色く枯れた葉だけ残っているシロモジの木があった。もうすでに花を満開に咲かせているマルバマンサクの黄色い花や、葉を落とした樹木の向こう側に白い花を咲かせているタムシバの木がいち早く春の訪れを知らせていた。静かな林の中を私たちの雪道を歩く音だけが聞こえた。時々聞こえる鳥の鳴き声。双眼鏡を持ってくればよかったのと思った。入り口まで下ってきて川べりに咲くバイカオウレンの白い花をもう一度屈んで見つめた。

「季節を変えて又ここへ来たいな。」早春の山門水源を満喫して帰途についた。



並木

1班 田中 悦朗

街を歩いていると、よく目につくのが街路樹である。よく育って、その周辺にマッチしていれば、しばしながめる。この木々は開発に伴ってか、道路整備のついでに植えられたのか、ここの由緒ある歴史を何年見つめてきたのかな、などと考察も。

青々と(ほんとうは緑々と)繁り、あるいはサツソウとそびえて並んでいる樹木(高木)たちは並木と呼ばれる。なかでも大きな公園内の並木道となると、少しは都会の喧騒から離れ、リフレッシュできる近場のオアシスとなっている。

なじみの大阪万博記念公園にも各ゾーンに並木が配列されている。私が選んだ「万博並木 5 景」をご紹介します。(ご希望があれば、ご案内も)

第1景 ケヤキ並木

千里橋からケヤキの丘を通り 300m両側に、悠々と背伸びしている、この白い木肌はほんもの。



第2景 鈴懸の径(プラタナス並木)

万葉の里と椿の森の間を横断 400mの石畳の両側にカノコ、迷彩模様の大木が自由に枝を張っている。古老はつい♪すずかけのみち♪……



第3景 染井吉野サクラ通り

太陽の塔後ろから東口まで 500m のそぞろ歩き。

第4景 樫の木並木

東口から入ると右手、日本庭園の塀沿い 1.2 km続く アラカシ・シラカシ。秋には大量のどんぐりが塀の足元へ。

第5景 ギンドロ並木

ソラードを歩くと間近にきらめく銀色の葉っぱ群は異色。

「しづやしづ」

米村 倭文子

「名前、むつかしいね、なんと読むの？」といつも聞かれるのでめんどくさくなって言ってるのではない。

『しづやしづしづの苧環(おだまき)くりかえし昔を今になすよしもがな』

この歌は源義経の愛人であった静御前が捕らわれの身となって鎌倉に送られ、頼朝の前でむりやり白拍子の舞を舞わされた時の歌である。

元は『いにしへのしづの苧環(おだまき)繰り返し昔を今になすよしもがな』と伊勢物語に出てくる歌である。この静御前の歌には『しづ』が3回もでてる。

最初の『しづ』は自分の名である静御前の『静』、2回目の『しづ』は白拍子という賤しい身分の『賤』、3回目の『しづ』は倭文布という古来の織物の『倭文』。

白拍子という賤しい身分のことを頼朝という大將軍の前で堂々とアピールした歌であるらしい。

さてこの『倭文』という織物、古くは『しづり』とか『しどり』と呼ばれ、万葉集や延喜式には『倭文』の名前の付いたものが帯・手纏・幣・鞍に残っている。

その材質はカラムシなど麻の糸を染めて青筋文様に織った布でしっかりした硬い布であったらしい。苧環(おだまき)は苧麻(カラムシ)の糸を巻きつける糸車。

歌のなかでは『倭文の苧環』が繰り返し巻きつけている様を歌い『しづ』を強調しているが、倭文布という織物、今はもうなくなっているようだ。

「誰がつけはったん？」お祖父さん、「学者さん？」いいえー！。いつもの会話である。たまに「しづこさんでしょ」と言われるとドキッとする。

私の玉手箱

糸鋸アート 事始め

2班 竹谷 律一



◎なぜか衝動買いで糸鋸を買ってしまいました。
お正月の蒲鉾の板に魚の骨
何となく面白そうなモノが出来そうな予感

◎次に形が面白そうなタツノオトシゴを切り出してみました。これはハウノキです。

◎杉板だと焼入れが出来て木目が面白そう。



◎白浜の京都大学水族館で見学したミノカサゴもモデルになって貰いました。カワセミ、ヘビクイワシも格好のモデルかも知れません。

◎小物入れにと発展してこんなモノになりました。



◎今は進化してミニチェロ作りです。背中と腹板はエンジュ、ボディーはハウノキ、指板、駒等はカリンの木等を使いました。糸巻きは爪楊枝にレモンの木の枝、弦は釣り糸です。



The End

俳句サロン
コーナー

松平 吉生

雀らはいつも近くに草萌ゆる
能面にあいさつ春の楽屋なり
おんおんと春落日の中走る
大地震(おおなみ)のあと山桜里桜
いちめんのたんぽぽ三川波青し
芽やなぎの影そよがせて鯉の鱗
山の灯のともるごとくに山桜
人類の二足歩行や松の芯
永劫に出会つてゐたる落花かな
チューリップ色を尽くして萎(しな)びけり

山上 恵子

夫寝(つまいぬ)る側の独酌月おぼろ
蜘蛛の囀に干からびてをり宿の主
すかんぼを失恋の味と感ぜし日
秘密基地こごみ採る撮る水の音
歳重ね今日初めての草の笛
草笛の数増し来たる川堤

牧野 能子

もこもこと新緑の山精気あり
近江富士を墨絵となせし黄砂かな
夏の野菜今が植え時多忙
簾越し隣のピアノはショパンかな
シャクナゲやせせらぎたどる吉井川
みどりの夜見知らぬ人と露天風呂

谷坂 修二

遠山にもっこり浮かぶ山桜
片栗が風に向かひて叫びをり
風そよぎ花わきあがる紫木蓮
帰り道タムシバ白く灯りけり
新緑の水をすくひて濡るる孫
屋久島にて
いなか浜海につながるカメの道
苔ふとん眠りも深き屋久の杉

下浦 美代

疲れくる我を迎へし柿若葉
天道虫庭の手入れはここまでに
豆ご飯いつの日できる鉢の苗

絵手紙/絵画
コーナー



(堀田 和子)



(中川 恵美)



(山本 祥子)

工作同好会
コーナー 《5月活動報告から》

子猫・のらくろ・パンダ・???



自然と文化だより
皆様のご協力により9号が発行出来ました。
次号をお楽しみに！(広報)